

教えるは 学ぶの 半ばなり

R6 南信教育事務所だより

教学半也



令和6年5月27日

No.3

令和6年4月16日 初任者研修 スタート研修

仲間と共に、新しい一歩！

初任者研修にたずさわる
全読者対象



南信地区に赴任した138名の初任者が一堂に会しました。研修の前半は、緊張や不安もあり、やや表情が硬い様子でした。しかし、互いの考えや思いを、伝え、聴き、つなげていく中で、少しずつ表情が和らいでいきました。



つながり ひろがり はじめた初任の先生方の輪

午後の研修会では、「目指す授業」を明確にしていく一步を踏み出した初任者の姿がありました。そこでは、南信地区に赴任された初任者が、共に高め合い学び合っていく仲間同士の「つながり」を感じながら、様々な初任者と語り合い、交流をしました。

「目指す授業」を明確にしていく一步を踏み出した初任者たち

研修前



伝えたいことが多くて、しゃべりすぎてしまうんです…。



子供が主体的に学ぶためには、どのような導入や発問をすればよいか悩んでいます…。

研修の様子



研修会では、「目指す授業」の具体やその理由を4人前後のグループに分かれて話し合いました。信州Basicを参考に、学び合える雰囲気のある学級づくりについても、考え合いました。



子供のことをよく知りたと思った。声、表情、行動等から、子供の気持ちを考えることで、伝える言葉が変わってくると感じました。【ふりかえり用紙より】

研修後



子供の主体性を引き出すために、一人一人の子供が何を学びたいのか、何に興味や疑問を抱いているのか、よく見ていきたいと思いました。【ふりかえり用紙より】



「楽しい」授業を目指したいと思っていたが、他の先生方と話し合う中で、「楽しい」とはなにか？という新たな疑問が自分の中で生まれました。これを考えることは子供たちに寄り添うことにもなるし、今後の大切な視点となると感じました。【ふりかえり用紙より】

「つながり」を感じながら語り合い、交流する初任者たち

研修前



新しい環境で分からないことが多く、うまくやっていけるか、漠然とした不安があります…。



小規模の学校で教科担当（学年担当）が一人なので、不安です…。

研修の様子



県内初任者の約35%が南信地区の学校に所属しています。初任者同士の「つながり」を感じながら、同学年や同教科同士、和やかな雰囲気でも語り合いました。



研修後



同じ教科の仲間がいることは、初任研コーディネーターの先生から聞いて知っていました。直接会って話すことができ嬉しかったし、少し安心しました。これからもつながりがあると思うので、出会いを大切にしたいです。【インタビューより】



同じ学年担当の先生方の悩みは、自分自身にも通じる悩みでもありました。明日の授業の参考になるような意見をたくさん教えてもらえることができ、とてもよい時間になりました。【ふりかえり用紙より】

今回のスタート研修では、「目指す授業」と「つながり」を視点に研修を進めましたが、各校の研修を推進する際においても、この二つを視点にしてみてもいいでしょうか。初任者は、授業実践を重ねる中で「目指す授業」をより明確にしていきますが、その過程において悩み不安になることもあります。その際の支えの一つに「つながり」があるでしょう。例えば、メンターチームの話し合いの場や、職員室の雑談の場で、初任者の「目指す授業」について定期的に話題に挙げることで、初任者にとって校内の先生方とのより強い「つながり」を感じるきっかけになるのではないのでしょうか。今後の事務所主催の研修でも、「目指す授業」「つながり」を大切にしたい支援を行っていきます。





本号では、前号に引き続いて、「教育課程編成・学習指導の基本」の中の、教育課程・学習指導改善の三つの重点とその具体について抜粋して掲載します。

3 令和6年度 教育課程・学習指導改善の三つの重点とその具体

重点1

資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

「探究する授業」

「探究する授業」とは、従前、重点1として取り組んできた「問いのある授業」が充実し、発展的に連続することによって実現するものと考えています。「探究する授業」を通して、「子供たちが自ら問いを見だし、問いの解決に向けて個人で、あるいは他者と協働しながら追究し、解を導き出したり新たな問いを見いだしたりする姿」が全ての教室で見られることを願っています。

では、「探究する授業」とはどういったことから生まれるのでしょうか。詳しく見ていきたいと思います。長野県では、これまで「子供と共に創る授業」を大切に考えてきました。

〈子供と共に創る授業〉

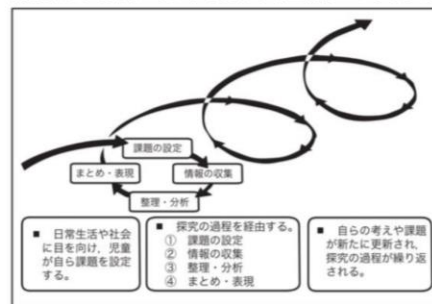
- ・子供の「問い」や「願い」「気付き」「考え」などに基づき、子供が主体的に追究していく学習
- ・子供が学ぶことの楽しさやよさを感じる学習、実感を伴った学習

この「子供と共に創る授業」の考え方は、学習指導要領の趣旨や理念とも重なってきます。むしろ、教育の「不易」な部分と言えるでしょう。長野県で行われてきた、子供に発し子供に還る優れた授業実践には、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点が、共通に、そして普遍的な要素として存在していました。

子供が主体的に追究していくには、「問い」や「願い」があることが大切です。子供は本来、「あれ?」「どうして?」「知りたい」「やってみよう」という知的欲求をもっています。その「問い」や「願い」が課題対決に向けた追究の原動力になります。したがって、教科等の学習では、学習対象となる事象などとの出会いや学習課題の設定過程を工夫すること、追究の過程で子供たちが学び方を選択できるようなすることなどが大切になります。

右の図は、総合的な学習の時間の、探究的な学習における児童の学習の姿を表したものです。日常生活や社会に目を向け、課題を設定した子供が、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった学習過程を経由し、自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される様子が示されています。こうした学びの姿は、総合的な学習の時間に限らず、資質・能力の育成に当たっては、どの教科等においても大切にしたいところです。その際、各教科等の「学習過程のイメージ」を参考にしましょう。

探究的な学習における児童(生徒)の学習の姿



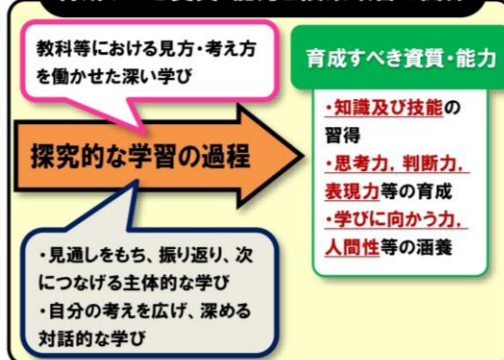
小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 (()内は中学校編)

【参考】中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm

本来、子供たちは、自分の解決したい課題を探究していくと、さらに調べたいことや、新たな問いが現れ、探究の過程が連続していくようになります。そのとき、一人一人の子供が、その子なりに働かせている見方や感じ方、考え方等と、各教科等における見方・考え方を関わらせて学びを深められるようにしていくことが欠かせません。その過程を充実させ、学びの質を高めるための授業改善の視点が「主体的・対話的で深い学び」です。資質・能力の育成に向けて、「探究する授業」を、子供と共に創っていきましょう。

育成すべき資質・能力と授業改善の関係



重点2

カリキュラム・マネジメントの充実による教育活動 「共創する教育課程」

これまで、「みんなの教育課程」としてきた重点を、昨年度より「共創する教育課程」としました。「みんなの教育課程」には、教職員、保護者、地域社会「みんな」で教育課程を創っていくこと、子供たち「みんな」のための教育課程にすることの二つの意味が込められていました。この二つの意味を大切に継承した上で、教職員や保護者、地域社会はもちろん、子供たちも含め、共に創り、より魅力のあるものにしていくことを目指していきたくて考えています。

子供と共に創るという点から考えてみると、教師側からの一方的な押し付けではなく、子供の実態を踏まえた、子供のための教育課程でなければなりません。「共創する教育課程」を実現していくためには、カリキュラム・マネジメントの充実が欠かせません。

〈カリキュラム・マネジメント〉

子供の実態を適切に把握し、教育課程を教科等横断的な視点で組み立て、評価・改善を図ることを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと

カリキュラム・マネジメントを推進していくためには、「つなげる」が必要です。大きな枠組みとしては、まず、学校と地域社会をつなげることが考えられますが、これについては重点3「つながる学校」として取り上げていますので、次ページを参照してください。ここでは、もう少し小さな枠組みで考えてみましょう。例えば、教職員と保護者をつなげること、教科学習と学校行事をつなげること、教科と教科をつなげること、校務と財務をつなげること等、様々に考えることができます。

したがって、自校の状況を踏まえ、何と何を、どのようにつなげ、どのような効果や成果を期待するのかを明確にしていくことが、カリキュラム・マネジメントの充実を図る際には大切です。これを明確にした取組が PDCA サイクルを動かす原動力となり、教育課程を共創する確かな基盤を築くことになると考えています。

長野県ではこれまでも、学校教育目標を達成するため、校長の方針の下に全教職員で、共に理解できるグラウンドデザインを作成し、日常の教育活動に生かすことなどを工夫し、「魅力ある教育課程」の編成を実施するなど、「カリキュラム・マネジメント」を進めてきました。その際、例えば、総合的な学習の時間などを中心とし、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習を核とした学校づくりが行われるなど、上に挙げた三つの側面を踏まえて、資質・能力の育成を教育課程の中で適切に位置付ける実践が行われてきました。

右の文章は、長野県の教員の先輩が30年以上前に書かれたものです。子供たちの個性は千差万別。長野県の教員は、子供たち一人一人を受け止めながら、きめ細かな支援をしてきました。私たちは、日頃の様子や各種調査等をもとに「診断的評価」を行い、様々な手立てを準備し支援する際に、学びの主体である子供を主語にして課題を見出してきたことに、あらためて注目したいと思います。「一人の子供も取り残されない教育」を目指し、いま求められているのは、こうした取組を組織的かつ計画的に実施することです。学校内外の人的又は物的な環境を確保することも視野に入れ、カリキュラム・マネジメントの充実を進めましょう。

カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- 1 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく
- 2 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- 3 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

特に傍若無人な一人の子どもには手を焼いた。授業中、自分の席に着いていることができない。歩き回る。奇声を発する。しかし、よくよくその子どもたちを見ると、興味ももてずに、困っていたのだ。私は、この子どもたちのそれぞれにふさわしい教材と活動を準備することにした。(要約)

重点3

家庭や地域社会との連携・協働 「つながる学校」

長野県では、期待感や充実感をもって、仲間と共に生活する喜びやたくさんの感動が生まれる「楽しい学校」を、子供・保護者・地域の方と一緒に創ってきました。

また、これまで築き上げてきた、学校と地域が連携して子供を育てる取組を土台にして、新たに地域住民が、① 学校運営参画 ② 協働活動 ③ 学校評価 を一体的・持続的に実施していく仕組みをコミュニティスクールとして整え、学校と地域住民の協働による地域とともにある学校づくりを進めています。社会と連携して子供を育てていくためには、コミュニティスクールの仕組みを生かしていくことが大切です。

さらに、今回の学習指導要領の改訂の基本的な考え方に、「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する」ということがあります。

社会に開かれた教育課程

“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む

そのために重要になるのが、学校・家庭・地域の連携・協力体制の構築です。体制の構築に当たっては、「熟議」と「協働」の視点をもって、共有の好循環を作ることが必要です。

つながる学校

①情報・課題・目標・ビジョンの共有 【熟議】

学校の教育目標や教育方針、それについての現状や課題、ビジョンについて、多くの当事者による「熟慮」と「議論」を重ねる

つながる学校

②アクション・実践の意味の共有 【協働】

同じ目的・目標に向かって、互いの立場を尊重しつつ協力して共に働く。「計画→実行→評価→改善」の過程の中で実践の意味を検討し合い、PDCA サイクルの質を高める

「つながる学校」では、地域と学校が、子供たちの学びのみならず、地域社会全体の活動の充実のために、熟議し、協働し、活動後の評価をして、また次の取組につなげていくというサイクルを生みだしていくことが重要です。その際、学校教育目標を家庭や地域と共有し、共通理解の基、教育活動を充実させていくことが必要です。家庭や地域社会と相互に共に学んでいく土壌をつくりましょう。

また、校種間で「つながる」ことも重要です。就学前の様子はどうだったのか、進学後はどうなのか、幼保・小・中・高の連携も推進していきましょう。子供たちの多様な成長を長いスパンで見えていくことが必要です。地域社会にとって、公立の小中学校、義務教育学校は、学齢期の子供の学びの場としての存在にとどまらず、地域の方々が集う場、また、文化が継承される場など、様々な価値を有しています。「つながる学校」を具現することによって、地域の未来の創り手を、地域とともに育てていきましょう。